

食育カルタ制作

—保育内容複数領域の科目間連携授業の試み—

鳥居美佳子¹⁾

古屋 祥子²⁾

山田 千明³⁾

キーワード：科目間連携授業、カルタ、保育内容（言葉）、図画工作（造形表現）、食育

はじめに：

幼児教育・保育においてそのねらい及び内容は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域にまとめ示されている。しかし、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうもの」「内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意」（幼稚園教育要領）、「5領域並びに『生命の保持』及び『情緒の安定』に関わる保育の内容は、子どもの生活や遊びを通して相互に関連をもちながら、総合的に展開されるもの」（保育所保育指針）と明記されているように、各領域はそれぞれ独立して存在するものではない。

保育者養成教育において、保育内容の授業担当者は、科目間連携の必要性を感じている⁽¹⁾。その必要性は感じながらも、神垣ら（2010）の領域「言葉」と領域「表現」の連携授業における紙芝居制作の試みのように、各々の授業が独立した状態のままになってしまうという難しさも指摘されている。

そこで本研究では、「言葉」領域「保育内容（言葉）」、「表現」領域「図画工作科基礎」、「健康」領域「子どもの食と栄養Ⅰ」の担当教員3名が話し合い、「総合的な指導」が実践できる保育者養成教育を模索するために、3科目連携授業でカルタ制作を試みることにした。

1. なぜカルタ制作か

3科目連携授業を行うにあたり、カルタ制作を取り上げた理由を「言葉」「造形」「食育」の観点から述べると次の通りである。

「子どもは象徴機能の発達や言葉の獲得などを通して、物と名前の結びつきや、表示などが示す物や事柄を理解」していくものであり、幼稚園教育要領解説（2008）には言葉の獲得について「幼児が日常生活の中で触れてきた文字を使うことで、文字を通して何らかの意味が伝わっていく面白さや楽しさが感じられるように、日ごろの保育の中で伝える喜びや楽しさを味わえるようにすることが大切である」「一人一人の幼児の文字に対する興味や関心、出会いを基盤にして、小学校以降において文

（所属）

^{1) 2) 3)}山梨県立大学

字に関する系統的な指導が適切に行われる」と書かれている。また、幼稚園や保育所は同年代の子どもが集団生活を営み、他者とのかかわり合いの中で、自分の思いを主張し、他者と折り合いを付ける体験をする場でもある。

このように「言葉」の観点から、カルタは集団保育という特性を活かし、楽しみながら言葉に対する感覚や言語生活を豊かにする保育活動といえる。

また、現在、日本にはたくさんの種類のカルタが出回っており、そのデザインには共通した点が見受けられる。その特徴は、イラストを使う絵札とフォントを使う読み札の2種類で認識しやすさを追及しながら、その異なった要素を持つ札に統一感を持たせる工夫や、遊びの内容に連動したサイズや仕様に仕上げることなどである。

「造形」の観点から、学生が自らカルタのデザインの特徴について分析し、実際に制作することは、子どもの取り組みを支える際に発達に応じて理解しやすく親しみやすいようにするにはどうすべきか考えるうえで重要である。また、カルタには、まだ文字に慣れない子どもが絵柄と文字の両面からアプローチすることで物事を学ぶといった教育的効果も期待でき、学生にとって、子どもの学びに対する理解の向上や総合的なデザイン力を高めることに繋がると考えられる。

さらに、食育の領域において、カルタは指導媒体として用いられている（高杉、2011）。堀西ら（2012）は、独自に開発した食育カルタを用いた食育プログラム実施後、児童の食に関する知識が高くなり、「遊びを通して」学ぶことができたことを

報告している。また、保育学科の学生が食育カルタの制作活動を通じて、領域「言葉」を土台に「食育」に関する資質が向上したことが報告されている。

以上のように、「カルタ」は総合的な児童文化材であり、また、保育者養成教育における「カルタ制作」は、保育内容指導において科目間連携授業の効果を具現する最も適した活動の1つである。さらに、完成した制作物は、就学前教育・保育施設における「遊びを通しての総合的な指導」に資する楽しい保育材として活用されることが期待されるものとなるのである。

2. 科目間連携の経緯

「言葉」担当教員は「保育内容（言葉）」の授業に2009年度よりカルタ制作を取り入れ、カルタ完成後、履修者全員でカルタ遊びを行うことにより読み札の言葉の言い回しの的確性について学生とディスカッションしていたが、絵札・読み札で使用する紙の材質、絵の表現についてさらに質を向上できないかと「造形」を専門領域とする教員に相談した。2011年度からは絵札・読み札で使用する紙を「造形」担当教員に提供してもらい形をとり、2013年度には栄養学を専門とする教員も合流、テーマを食育に絞り、2年次生開講科目「保育内容（言葉）」、「図画工作科基礎」、「子どもの食と栄養Ⅰ」の3科目連携による授業内容編成を試みた。2014年度は「食育」担当教員が休暇中だったので「保育内容（言葉）」、「図画工作科基礎」のみの2科目連携授業を行ったが、2015年度の「保育内容（言葉）」の配当年次変更に伴い、その後は3科目同時の連携授業を展開す

ることができなくなった。

そこで、2015 年度からは、1 年次に「保育内容（言葉）」を履修、2 年次に「図画工作科基礎」と「子どもの食と栄養Ⅰ」の 2 科目連携授業を行うという変則的な 3 科目連携授業の形態となった。

3. 食育カルタの制作

(1)制作した学生および科目

制作した学生および科目は以下のとおりである。

1)2013 年度：人間形成学科 2012HH 生 ②

2 年次に「保育内容（言葉）」、「図画工作科基礎」、「子どもの食と栄養Ⅰ」を履修した学生 33 名

2)2015 年度：人間形成学科 2014HH 生

1 年次に「保育内容（言葉）」、2 年次に「図画工作科基礎」、「子どもの食と栄養Ⅰ」を履修した学生 33 名

(2)食育カルタの制作方法

2013 年度と 2015 年度制作の流れと科目間の連携、各教員の役割を以下に述べる。

1)2013 年度

2013 年度は、「保育内容（言葉）」、「図画工作科基礎」および「子どもの食と栄養Ⅰ」の 3 科目で連携した。

①1 コマ目（6 月 19 日 3 限）・・・3 科目合同で導入

まず、「言葉」担当教員からカルタの概要（日本の平仮名を活かしたもの）を説明された。カルタの例として、「上毛カルタ」、NPO 法人子育てサポーターチャオ作「子どもの安全カルタ」、茨城県立竹園高等学校



図 1 カルタについての解説風景

保健委員会環境班作「環境カルタ」、「甲州弁いろはかるた」、「つばめっ子かるた」^③、山梨県立大学人間福祉学部人間形成学科学生作「形成あるあるカルタ」などが紹介され、実際にそれらを用いてカルタ遊びを行った。また、カルタで遊ぶことの意義や、将来の保育活動における活用の可能性なども解説された(図 1)。

次に、「造形」担当教員から、カルタの読み札と絵札のデザインや材料の特徴がレクチャーされた。絵札の構図（文字の位置や大きさ）、文字を丸で囲むこと、読み札の内容を反映した絵であること、縁取りの有無などについてや裁断機の使用法、統一感のあるカルタを制作するための作業分担についてなども説明された。

そして、「食育」担当教員から、食育媒体の一つとしてのカルタについて、テーマ設定の考え方や情報収集の方法、内容を吟味する必要性について解説され、使用画材やサイズをグループに分かれて検討するなど制作に着手した。

②2～4 コマ目（6 月 26 日 3 限、6 月

27 日 4, 5 限) : 制作

グループに分かれて、カルタを制作した(図 2)。授業では時間が足りず、授業時間外にも制作するグループが見受けられた。



図 2 カルタの制作風景

③5 コマ目 (7 月 3 日) : 3 科目合同で発表および評価

すべてのグループが制作したカルタで遊び、自己相互評価をグループ単位で行った。評価の基準は、各グループで設定した。

④6 コマ目 (7 月 24 日) : 3 科目合同で制作のふりかえり

教員が作成した「ふりかえりワークシート」が配付され、項目に沿ってグループごとに制作のふりかえりを行い、記入し発表した(図 3)。

2)2015 年度

2015 年度は、「図画工作科基礎」および「子どもの食と栄養 I」で連携した。対象学生は、1 年次で「保育内容(言葉)」を履修済みであり、カルタ制作を経験したことがある。

「保育内容(言葉)」における担当教員から 2014HH 生に対し、2013



図 3 振り返りシートの記入

年度と同様「上毛カルタ」「甲州弁いろはかるた」などを紹介しながらカルタの概要を説明し、カルタで遊ぶことの意義や、将来の保育活動における活用の可能性などの解説が行われた。その後、2014HH 生は 2013 年度以前の学生の作品である「職業カルタ」「都道府県カルタ」「童話カルタ」なども用いてカルタ遊びを行った。

①1 コマ目 (5 月 7 日) …「図画工作科基礎」で導入

「造形」担当教員から、カルタの歴史に関する参考資料が提示され、そのデザインの特徴や用途との必然性を探求した。その後グループ分けを行い、使用する紙の種類や大きさ、フォルムについて検討し、制作に着手した。

②2 コマ目 (5 月 20 日) …「子どもの食と栄養 I」で導入

「食育」担当教員から、「食育の計画」に関する資料が配付され、カルタを食育媒体の一つとして考えて制作するよう指導された。資料の内容

は、「保育における食育計画の手順」「保育における食育の内容」から構成されている。食育の内容では「食育の5項目…食と健康、食と人間関係、食と文化、命の育ちと食、料理と食」や「食育における5つの子ども像…①お腹がすくりズムがもてる②食べたいもの、好きな物が増える③家族や仲間と一緒に食べる楽しさを味わう④栽培、収穫、調理を通して、食べ物に触れはじめる⑤食べ物や身体のことを話題にする」が説明された。2013年度と同様に、情報収集の方法、内容を吟味する必要性についても解説された。さらに、「食事バランスガイド」についての説明があり、望ましい食事のととのえ方が教授された。

③3 コマ目 (5月27日) …「子どもの食と栄養Ⅰ」で制作

グループに分かれて、カルタを制作した。

④4～6 コマ目 (5月14、21、28日) …「図画工作科基礎」で制作

グループに分かれて、カルタを制作した。

⑤7 コマ目 (6月3日) …2科目合同で発表、評価およびふりかえり

すべてのグループが制作したカルタで遊び、自己相互評価をグループ単位で行った。教員が作成した「ふりかえりワークシート」が配付され、項目に沿ってグループごとに制作のふりかえりを行い、記入し発表した。

⑥8 コマ目 (7月24日) …2科目合同で制作のふりかえり

自己相互評価のまとめを各グループに返却し、各教員から評価についてコメントした。

4. 幼稚園でのカルタ遊び

2015年度までは大学生しかカルタ遊びを実施しなかったが、2016年度は、2014・2015・2016年度(2016年度は2015年度同様、1年次に「保育内容(言葉)」を履修した上での2年次「図画工作科基礎」、「子どもの食と栄養Ⅰ」の2科目連携で実施)の授業で制作したカルタを用いて2016年7月11日に幼稚園児に実際に遊んでもらった。協力者はA幼稚園年長児クラス27名並びにA幼稚園年長児クラス担任らである⁽⁴⁾。

担任教諭から、A幼稚園年長児クラスではカルタ遊びの活動経験が全くないという話を聞いたので、慣れるため市販のカルタを数種類幼稚園に届け、年長児クラスの幼児達にカルタ遊びをしてもらった。その後、筆者らの担当授業で学生が作成したカルタで遊んでもらった。年長児クラス27名を文字の理解度別に4グループに分け、読み手は担任の教諭2名、副園長1名、ボランティアの母親1名であった。

5. 制作の振り返り

以上、食育カルタ制作について事前指導および制作過程について述べたが、ここでは、学生による制作のふりかえりについて、分析し、科目間で連携した成果を論ずる。

2群に共通するふりかえりの内容は、以下の6項目である。

①工夫した点

②他のグループの工夫で取り入れたい点

- ③残った課題（言葉、造形、食育）
- ④この経験・活動を通して、新たに得た知識・技術
- ⑤この経験・活動を通して、新たに見つけた課題
- ⑥今後、この経験・活動をどのように生かしたいと思いますか？

2012HH 生は、全項目についてグループ単位で、2014HH 生は1～3をグループ単位で、4～6を個人でふりかえり、担当教員が作成したワークシートに記入した。2つの学年のふりかえりの特徴を以下に述べる。

①工夫した点

[言葉]

2012HH 生からは、読むときにリズム良くするための工夫、2014HH 生からは一文に一つの食材を取り上げ、簡潔に言葉・栄養素とその効果について示す等の工夫をしたという記述があった。

[造形]

造形に関して学生が工夫した点は、2012HH 生と 2014HH 生の両者に共通して、カルタや箱の形状、カルタのコンテンツ、統一感の3点にまとめることができる。カルタや箱の形状に関しては、2012HH



図4 2012HH 生 制作カルタ



図5 2014HH 生制作カルタ



図6 郷土料理をテーマにしたカルタ（2014HH 生）：読み札は正方形、絵札は円型にして、色による縁取りを施す



図7 テーマを野菜に限定したカルタ（2012HH 生）：リアリティのあるイラストの効果を狙う

生ではふちどりや色合いなど見た目の工夫に重きが置かれる一方で、2014HH 生では、これらの見た目の工夫のほかに、幼児が使いやすい大きさや親しみやすく楽しめる形(丸いカルタやお弁当箱型の箱など)にするなど使用者の立場に立った工夫が施されていた。カルタのコンテンツについては、両者ともに食べ物絵の質にこだわり、リアリティや写実的なデザインにしようと努力していた。また、カルタの統一感を出すための工夫も見られ、2012HH 生ではカルタのジャンルを野菜に限定したり、2014HH 生にも共通する特徴として字と絵の担当を分けて作業するグループが存在した。

[食育]

2012HH 生は、食育の領域を幅広く意識することやおいしい食事のイメージを大切に表現する工夫をしたことがわかった。一方、2014HH 生は、食材に含まれる栄養素や食事バランスガイドにのった食材の分類、各都道府県の郷土料理、世界の食文化など様々なテーマを設定し、2012HH 生に比べ、カルタを教材として意識して制作したグループが多かった。

②他のグループの工夫で取り入れたい点

[言葉]

2012HH 生から「語呂のよさ」、また、2014HH 生からは、「解説書の書き方」が出された。「言葉」領域においてはカルタの読み札の工夫にとどまらず、解説書に何をどのように記述すれば利用者やカルタ遊びを援助する大人に対しわかりやすく趣旨を伝えることができるか、という点にも留意する必要があることがわかる。

[造形]

学生が他のグループの工夫を見て取り入れたい点も、①と同様の3点にまとめることができ、両者ともに、自グループとはカルタや箱の形状で異なる点について言及するコメントが多かった。また、2014HH 生では、他のグループの作品を見て、カルタの統一感を絵札・読み札・箱・付属品すべてでトータルに考えることの必要性や、「色で栄養素がわかる工夫」といった子どもの“学び”を意識する重要性に気づくコメントも見られた。

[食育]

2012HH 生は、造形に関する記述が多く、食育に関する記述は、1点(カルタのテーマを絞ること)のみであり、食育に関しては、他のグループから学ぶ点がほとんどなかった。一方、2014HH 生は、解説書を付いたり食事バランスガイドにのっとして食材別に絵札を色分けしたりして学習効果を高める工夫があると気づいたことがわかる記述が多かった。

③残った課題(言葉、造形、食育)

[言葉]

2012HH 生と2014HH 生の両者に共通して、栄養学の用語(老化予防、塩分等)を発達段階に合わせてどのように表現したら幼児に伝わるのかが検討課題である。また、読み札の表記もカタカナ、英語の語彙の使用について反省事項として挙げられた。また、「を」「ん」の扱いに苦労したことがわかった。2014HH 生からは、「対象年齢と言葉のリズムを考えながら食材の説明をするのが難しく、浅い内容だと捉えられてしまうものもあった」「似たような内容になってしまった箇所があり、飽きがくるのではないか」という課題が出された。読み札

作成の過程での全体調整の必要性が見いだされる。

[造形]

2012HH 生と 2014HH 生ともに、カルタや箱の形状的な質に関して課題を挙げたコメント（ふちどりがなかった、余白が多かった、箱がしまらなかったなど）が多かった。カルタのコンテンツでは、イラスト内容の選択や文字と絵のバランス、絵が似てしまうなどに課題を感じていた。また、2014HH 生では、「下書きの消し忘れや囲み忘れがあり、最終的なチェックが必要だった」や「色塗りが乱雑になってしまった部分や箱作りがおざなりになってしまい、時間に余裕ができるように作業を進めるべきだった」といった制作への取り組み方に関する課題が挙げられていた。これらのコメントから、学生は限られた制作時間の中で失敗を経験しながら、計画的に実施することの重要性に気づくようであった。

[食育]

2012HH 生は、食育に関連した課題として、専門知識の不足を挙げたグループが多かった。また、テーマの設定に苦慮したグループも存在した。そして、子どもにとってわかりやすい言葉を使って専門的な知識を表現することが難しいと感じたことがわかる記述が多かった。この点については、2014HH 生も 2012HH 生と共通していた。一方、2014HH 生が 2012HH 生と異なる点は、教材としての目的が明確であるカルタを使って遊んでみて、自グループのカルタに不足しているものを分析し記述した点である。さらに、2014HH 生では、「カルタの学習効果」について、課題として挙げたグループも存在した。

④この経験・活動を通して、新たに得た知識・技術

[言葉]

2014HH 生から、相手を意識し、相手に「伝わる表現とは」について文章表現やリズム、文字の大きさ、ルビうち等考え、自分の作品を作り上げていくことの楽しさを体験したようである。

[造形]

2012HH 生では、色の塗り方や裁断機の使い方など、制作スキルを学んだというコメントがほとんどであった。一方、2014HH 生では、これらの制作スキルの他に、色彩感覚や配色、文字と絵のバランスなど造形的感覚が養われたとするコメントも見られた。また、2014HH 生では、2012HH 生に比べて子ども向けの作品であることを意識して制作したというコメントが目立つのも特徴である。「けがや危険を考えて角を丸くしたり、大きさを変えた」や「興味・関心を引くような色使い」、「楽しんでもらうことができるような仕掛けのある箱」など、カルタ制作を通じて子どもの立場から考えることの大切さを学んでいた。

[食育]

食育の領域では、2012HH 生は「野菜」「果物」「体調に合わせた栄養素の摂り方」などに関する知識が挙がっていた。2014HH 生も同様の記述が多かった。2014HH 生は、これらの知識に加え、食品成分表を活用する技術が向上したり使用目的が広がったりしたという記述も認められた。「食事バランスガイド」にのっとって食材を分類してカルタのテーマとしたグループのメンバーは、「栄養群の知

識を得ることができた」と記述しており、単なる食品や栄養の知識にとどまらず、技術を習得し、実践的な学びの機会となったことがわかった。さらに、知識や技術以外にも、学ぶ姿勢に変化が認められる学生が存在した。例えば、「子どもたちに学んでほしいことを発見できた」「食育といっても食べ物そのものだけではなく、地域性や周りの環境、人間関係など様々な物がかかわっていることがわかった」「食育を子どもたちにどう伝えたとよいか、その後の子どもたちの生活に反映するような効果をもたらすにはどう工夫したらよいかを発見できた」など、食育の目的を見出したり食育の環境を認識したり食育の継続性・発展性における保育者・教員の役割について考えたりして、講義で知識としては理解していることについて、カルタ制作の体験を通じて理解を深めることができたのではないかと考えた。

2014HH 生では、複数領域を関連付けた記述が認められた。例えば、「言葉」と「食育」を関連付けた内容として、「簡単にリズムよくその食品のことを説明する」「『～さん』『～くん』という言い方をすると食材であっても身近に感じること」、「造形」と「食育」を関連付けた内容として「絵札を描くにあたって、その食材の写真などを見て食材の特徴や色などちゃんと知ることができ、新たな発見が多くあった」などが挙げられる。一方、2012HH 生では、「言葉」「造形」「食育」の複数領域を関連付けた記述は認められなかった。

⑤この経験・活動を通して、新たに見つけた課題

[言葉]

2014HH 生の記述を見ると、カルタ制作を通して発達段階に応じ、わかりやすい語彙や文章表現を用いる必要性について実感を伴って考える機会いいとなったようである。カルタ遊びをする時点で理解可能な言葉を使用するか、あるいはカルタ遊びを通して言葉を学ぶ機会にするか、「カルタ遊びをやる段階で理解可能な語彙・表現」と「今は理解に困難を感じるがカルタ遊びを通して学ぶ語彙・表現」の使用割合について今後検討していく必要がある。

また、読み札の文の長さについても「豊富な内容を盛り込みたい」ということと「楽しむためには短文で分かり易くした方がよい」ことの調整が必要であることに気付いたようである。

[造形]

2012HH 生と 2014HH 生に共通して、カルタ制作を通じて自身の造形的感覚を見直し、制作の難しさに気づいたとするコメントが見られた。例えば、2012HH 生では「自分達がふわふわしている方が良いと思った絵を他の人ははっきりしている方が良いと感じていた」、2014HH 生での「絵が個性的になってしまう」や「シンプルな絵札は見やすくいいと思ったが、さみしくもなってしまう」などが挙げられる。同時に、表現力の向上を課題に挙げる学生も存在し、「絵で言いたいことを表現すること(2012HH 生)」や「イラストの表現力を広げたい(2014HH 生)」などのコメントが複数見られた。

また、2014HH 生では、「全員で札を1枚ずつ考えていたので時間がかかった」や「役割を分担して行っただが、誰かに負担が重くなってしまっていないか少し気にな

った」など、グループ制作ならではの課題が挙げられていた。学生のコメントからは、自分の役割を自覚し一人ひとりが互いに気を使うといった、グループで作業する際に必要な態度に言及する内容も見られた。

〔食育〕

2012HH 生と 2014HH 生に共通して認められた記述は、「対象年齢に適した内容かどうか」を問うものであった。

2014HH 生では、食に関する知識を得ることができたものの、まだ専門的知識が不足していると感じた学生が多かった。特に、知識として詰め込むだけではなく、日常生活の中で普段から食に関心を持つことを今後の課題として挙げた学生もいた。また、情報収集の際に正確な情報か判断する力を身につけたいと感じた学生もいた。わかりやすい表現の工夫に関する記述が多く、とくに、言葉と関連した記述が認められた。さらに、継続的・発展的な指導により学びを深めるにはどのような工夫ができるか、学びと遊びをどのように両立させるか、保護者・家庭とどのように連携するか、など、食育を实践するうえでの重要な課題を認識した記述も認められた。1 人であったが、自分自身の食生活をふりかえって見直すきっかけとなった学生も存在した。

⑥今後、この経験・活動をどのように生かしたいと思うか。

〔言葉〕

2014HH 生の記述を見ると、子どもに限らず、ある物事を少ない文章や小さな絵でしか表現できないとき、どの部分を残しどこをカットすれば伝わりやすくなるかについて考えるいい機会となったようだ。

保育職に就いたとき、ここでの学びを保護者向けのおたより作成等に活かしたいという記述もあったが、市販のものを活用するだけではなく、オリジナル作品を自分で考えて作成することの楽しさ、「伝わる」要素や意味を考えたこと、楽しく学ぶ方策のヒントが得られた意義は大きい。

また、子どもには好みに合わない食材イコール「嫌い」にならないような言葉掛けの工夫とその裏付けとなる知識の習得、「子どもとの食事場面でそれを伝えながら食への関心をひく」必要性等、カルタ制作・カルタ遊びを通して自然な形で豊かな食生活の援助ができるという気づきは、まさに、各領域に示すねらいが、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうということの実感でもある。

〔造形〕

2012HH 生の造形に関するコメントは、制作におけるスキルと安全面について言及する 2 つに限られていた。しかし、造形、言語、食育の全体に関わるコメントからは、使用者が楽しみながら学べる教材や年齢に合わせた作品を制作する必要性が指摘されており、学生が今後の授業や実習に活かそうとする意欲が感じられた。

2014HH 生のコメントは、2012HH 生と比べてより具体的で子ども志向的であった。例えば、「保育職に就いたときには壁面装飾や掲示物、お便り等の作成のときに生かしたい」や「現場に出て、子どもに分かりやすい絵を描いてあげる」など、授業や実習ばかりでなく将来の職場での活用をイメージしたコメントが見られた。また、

2014HH 生では、グループでの共同制作に必要なプロセス（役割分担やプランニング）や取り組む姿勢（意思伝達や協力）についてのコメントが複数見られ、今回の経験を通じて、他者と協働する上で必要なスキルや心構えを学んだ学生がいることがわかった。

〔食育〕

食育に関する内容では、2012HH 生と2014HH 生に共通して、カルタ以外にも楽しんで遊びながら学べる教材・媒体を作りたいという記述が多かった。また、造形に関するコメントと同様に、2014HH 生では2012HH 生に比べ、実際の食育の場面での活用をイメージしたコメントが認められた。具体的には、子どもが理解しにくい専門的な内容を説明する能力に関することや、日常の保育の中でも継続的に食に興味を持ってもらう工夫に関することなどであった。

6. 考察

それぞれのグループのカルタ制作から、学ぶことや気づきは異なるものの、曖昧だった知識を確かな情報として表現するために、学生達は、調査・確認するのに時間と労力を費やした。知らなかったことや、曖昧だった知識を確かな情報として表現するために、調査・確認することで、新たな知識が身に付いたと考えられ、食育カルタの制作は、学生において学習効果があることが示唆された。

2012HH 生と2014HH 生に共通して、学生はカルタの形状やコンテンツ、統一感を意識しながら工夫して制作に関わり、他グループとの比較を通じて自グループの

不足分に気づき、自身の造形的感覚を見直すきっかけとなっていた。2014HH 生では、2012HH 生に比べて子ども志向的なコメントが多かった。今回の授業経験を通じて、子どもが楽しみ親しみをもてる絵にするには、色や形のテイストをどのようにすればよいのか、一方で教材として利用するにはどの程度リアリティが必要なのかなど、悩みながら学んだことが伺える。また、2014HH 生では、グループ制作ならではの課題が挙げられていたことも特徴的である。学生は、限られた制作時間の中で失敗を経験しながら、計画的に実施することの重要性に気づくとともに、自分の役割を自覚し一人ひとりが互いに気を使うといった、グループでの協働に必要な態度も学んだと思われる。また、保育者・教育者の立場で、カルタに関連した知識の必要性を感じたグループもあった。幼児や児童に対して、食育する場面をイメージしていることが示唆された。

食育については、「育てたい”食べる力”（幼児期）（学童期）」や「子ども像」などと照らし合わせて、内容が対象年齢に適しているかどうか判断できるが、言葉の言い回し等については食育担当の教員一人では指導が難しい。その意味で、言葉担当教員の関わりは重要で、他領域の科目の連携の意義が見いだされる。

反省点として、カルタを媒体として用いた食育の目的や目標を明確にしてから制作にとりかかる必要があった。今後、具体的な目的をもって、連携を深める必要性があること、加えて、媒体としてのカルタの有用性を検討する必要がある。

3 科目連携を行うことにより「言葉」担

当教員が単独で行っていた活動と比較し次の3点で効果がみられた。すなわち、1) カルタの内容が食育に焦点化され、食育の専門教員の指導のもと読み札の内容が科学的根拠のあるものとなった、2)「造形」担当教員の指導のもと、絵札の表現や構図が向上しただけでなくカルタを収納する箱や袋作りも充実した、3) カルタ制作、カルタ遊び、感想の共有だけではなく、客観的な評価を実施することになった、である。このように科目連携の意義は大きい。

おわりに：今後の課題と展望

年長児クラスでのカルタ活動を通して、主任、読み手としてご協力いただいた副園長のコメントを基に幼児によるカルタ遊びから見えた今後の課題をまとめてみたい。



図8 協力園におけるカルタ遊び風景

第1に、絵札と読み札の関係である。読み札の最初の言葉と絵札の絵が一致するものと異なるものでは、一致するものの方が幼児には取り易い。一致するものは年中児向け、異なるものは年長児向けというように、一致するもの、異なるもの、混在するものとバリエーションをつけたカルタ制作をすると、様々な発達段階の幼児が

楽しめる。一目見て絵札と読み札の関連がわかりにくいと「自分はどうせ取れない」と思って諦めてしまう場合もある。そこで、一目見てわかるような絵札を入れておくと、言葉の理解が苦手な幼児でも、弱視の幼児でもカルタ遊びに積極的に参加できる。また、今回の作品の中には、読み札の文言の長いものや短いものがあつたが、ある程度標準化する方が幼児には親しみやすい。長過ぎるものは、読み札を読み終わる前に幼児達が絵札を取ってしまい間延びがする。

第2に、読み札の文言のリズムである。「～のいちご」、「～のきゅうり」、「～のトマト」と最後のところに野菜や果物の名称をもってくるとリズムカルな響きとなり、幼児はカルタ遊びの世界にスムーズに入り込める。

第3に、濁音の問題である。読み札は「だ」から始まるが「た」の絵札を取るというのは難しいので、濁音を避けるか、あるいは幼児に理解しやすい他の方策を検討する必要がある。

第4に、絵札に工夫があると幼児が興味をもち易い。例えば今回、「世界の料理」のカルタの裏には各国の国旗が描かれていたが、年長児クラスの幼児達が国旗に興味をもっている時期だったので楽しさが倍増したという。

カルタは繰り返し遊ぶものである。その特性を活かし、ある言葉を聞いただけで絵が浮かぶもの、言葉を楽しむもの、知識を豊かにするものといった多様なカルタがあるとよいという助言もいただいた。今回カルタ遊びをした中に弱視の幼児がいたが、視力の弱い幼児にも楽しめるはつきり

した絵札への配慮は必要であろう。また、「愛情たっぷりお弁当」「家族みんなで楽しくごはんを食べよう」といった表現に心を痛める幼児もいるかも知れない。

カルタ制作にあたり留意すべきこれらの事項と同時にもう1点重要なことは、保育者をはじめとした大人の関わりである。今回読み手の一人は「『血液』って知ってる？」等、読み札をただ読むだけではなく、ポイントポイントで幼児達に適切な言葉掛けを行っていた。読み手、すなわちファシリティーの関わり方により、カルタ遊びの質が変わることが今回の観察により明らかになった。

以上のような問題点を基に改訂作業を進め、幼児や保育者と共に改訂版カルタを制作したい。今回カルタ遊びに協力してくれた年長児クラスの担任の1人は、筆者らの勤務する大学の卒業生である。卒業した先輩と現役の学生が協働してより質の高い保育材を制作する試みとしても、今回のカルタ制作は意義深いものである。

【注】

- (1) 白川ら(2008)の調査からも、ほとんどの担当者が保育内容研究の教科間連携の必要性を感じていたことがわかったという。
- (2) 「2012HH」は、履修者の学籍番号の上6文字である。学籍番号は入学年度と学科の略記で表現される。2013年度の2年次生の学籍番号は「2012HH」から始まりその後は個別番号が割り振られる。ここで「2012HH生」とは2013年度の2年次生を意味する。同様に

「2014HH生」とは2015年度の2年次生を指す。

- (3) 「つばめっ子かるた」は、新潟県燕市合併5周年でスタートした「燕はひとつプロジェクト」が公募で選定したカルタ。公募作品を修正して読み句を作り、読み句に合わせて黒井健(新潟市出身の絵本作家)が絵札の原画を描き、長谷川白楊(燕市の書家)が読み札の文字を書いたご当地カルタである。
- (4) 読み手として、担任教師以外にも副園長や当日幼稚園の保育ボランティアをしていた保護者にも御協力いただいた。

【引用文献】

- (1) 神垣彬子他(2010)領域「言葉」と領域「表現」の連携授業についての一考察ー保育者養成校における科目間の試験的連携ー、幼年教育研究年報第32巻、95-100
- (2) 厚生労働省編(2008)保育所保育指針解説書、フレーベル館
- (3) 白川佳子・東ゆかり(2008)二年制保育者養成課程における「保育内容」科目の連携に関する一考察ー学生アンケートと「表現Ⅱ」「図画工作Ⅱ」の連携授業の実践を中心としてー、鎌倉女子大学紀要第15号、85-99
- (4) 高杉志緒(2011)保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告ー「山口食育カルタ」制作を通してー、下関短期大学紀要第29号、9-26
- (5) 堀西恵理子他(2012)小学校にお

- ける「あいち県版食育カルタ」を用いた食育プログラムと効果について—低学年の場合—, 金城学院大学論集自然科学編第 8 巻第 2 号、18-24
- (6) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説、フレーベル館

【参考 Web サイト】

- (1) ケンオー・ドットコム
<http://www.kenoh.com/2012/03/22/karuta.html> (2016 年 10 月 31 日閲覧)

Making *Karuta* (Picture Cards for a Traditional Japanese Game) for Food and Nutrition Education : Trial for Effective Learning Through the Integration of Curriculum Content in Early Childhood Care and Education Classes

Mikako Torii¹⁾

Shoko Furuya²⁾

Chiaki Yamada³⁾

Abstract

Three professors who are teaching elements of the early childhood care and education curriculum (language, arts and handcrafts as artistic expression, and food and nutrition) cooperated to teach students how to make *Karuta* picture cards for a traditional Japanese game, in order to find an effective teaching method in an integrated class. After making and playing *Karuta*, students evaluated their learning objectively. The last step of this activity was asking children to play *Karuta* games in a kindergarten where an alumna works as a teacher.

Through this activity, students not only enlarged their knowledge of food and nutrition, but they also learned how to put the acquired knowledge into a food *Karuta* game by using appropriate words and pictures. Because some students felt that they had become more competent through this activity, they went on to make sophisticatedly decorated boxes. In addition, it can be said that this trial improves the abilities of kindergarten teachers and/or child care workers. It was also observed how important a teachers' way of communicating with children is during the playing of *Karuta*. Appropriate and inappropriate communication with children affected the results of *Karuta* games. Furthermore, this study points out the importance of creating teaching materials or games through collaboration with college students and alumna.

Keywords:

Integrated Class, *Karuta* (Picture Cards for a Traditional Japanese Game), Curriculum Content of Early Childhood Care and Education (Language), Arts and Handcrafts (Artistic Expression), Food and Nutrition Education,

^{1) 2) 3)} Yamanashi Prefectural University